郷土愛に立脚した“住民立”の診療所「村おこし」の拠点としても機能

医療法人 坂上健友会
大戸診療所
（群馬県東吾妻町）

診療科目／内科，外科，整形外科，心療内科
＊往診，訪問看護，訪問リハ実施
＊禁煙外来併設
外来患者数／ 32 人／日（2014 年実績）
職員数／医師 7 名（常勤 1，非常勤 6），
看護師 2.5 名，その他 4 名
併設事業所職員数／ 23 名（常勤 13，非常勤 10）
（2015 年 3 月現在）

もし，街から病院や診療所が消えたら，と考えたことがあるだろうか。非現実な話ではない。様々な理由から全国で起きている事態である。

そうなっても，職員は新たな道を行くことができる。だが患者は違う。都市部ならまだしも，いわゆる「へき地」であれば，閉院は文字どおり死活問題だ。しかもそれが国立の医療機関であったなら，住民が反発するのは当然だ。

しかし国は，そんなことは意に介さず，物事を「粛々」と進めていくもの。やがて地域には諦観が広がり，理不尽な“仕打ち”を受け入れざるをえなくなる…。そんな光景は，過去に幾度となく繰り返されてきた。

▲ 2005 年に日本テレビ『24 時間テレビ』から寄贈された福祉車両。

しかし，そんな流れに抗い，危機を自立の気運に昇華させ，**住民たちの手で医療施設を立ち上げた事例**がある。群馬県東吾妻町の「医療法人坂上健友会 大戸診療所」だ。20 年前に誕生し，医療だけでなく，いわゆる「**村おこし**」**の拠点としても機能**しているという。

どんな診療所か取材した。

110km² 内の医療を一手に担う

高崎駅から車で北西へ約 1 時間，または渋川駅から車で西へ約 50 分。草津街道（国道 406 号）に面して大戸診療所はある。ドーム形の屋根が目を引くライトグレーの建物が診療所。敷地内に隣接して「デイサービスセンターおおど／おおど介護支援センター」もある。

「当診療所がカバーする範囲は，西は長野原町との境を成す山々のふもとから，東は榛名山の西麓にまで及びます。面積は約 110km²。かつて吾妻郡坂上村だった地域です」

こう説明するのは「医療法人坂上健友会」の今野義雄・常務理事。同法人の実質的なリーダーである。

現在の東吾妻町は 2006 年に誕生したが（吾妻町と東村が合併），坂上村はその半世紀前の 1955 年まで存在した村だ（この年に 1 町 3 村が合併して吾妻町となった）。大戸診療所がある大戸地区は，旧坂上村の中心地。現在も小学校や町役場支所，郵便局などがある。さらに時をさかのぼれば，草津街道の宿場町であり，国定忠治が破り，処刑された「大戸関所」があったことでも知られる。

東吾妻町には現在，原町日赤病院と 4 つのクリニックがあるが（歯科を除く），大戸診療所以外は，すべて JR 吾妻線沿いにある。**同診療所は東西約 17km，南北約 10km の広い範囲を一手に担っている**。来院する患者の約 8 割は 65 歳以上だが，公共交通機関は 1 日 7 便のバスのみ。しかも自宅から停留所まで，歩いて 1 時間近くかかる人もめずらしくない。冬になれば積雪もある。同居する家族がいても，日中は働きに出ているので，送り迎えはできない。自

力での通院は望めない患者が多いのが実状だ。

「そのため当診療所では**ワゴン車で無料送迎**を行っています。地区を回って患者さんを乗せ，帰りは自宅まで送ります。これは設立当初から続く取組み。本来なら行政が行うべきだと思いますが，できることは自分たちでやろうと始めました」

現在はデイサービスの送迎を行うリフト車２台や訪問看護用の自動車を含めて**計 12 台が稼働**。今野常務理事は「車は自宅という《病室》と診療所を結ぶ《廊下》だ」と語る。地域全体を１つの病院に見立てている。

「大きいことを言うようですが，無料送迎の根底にあるのは，日本国憲法第 25 条の精神です。『すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する』…いわゆる『生存権』ですね。この地域の人々も当然，この権利をもっている。ただそれには，**医療を受ける機会が，誰にも等しく保証**されている必要があります」

大戸診療所が設立される前，いわば「地域の生存権をめぐる戦い」がこの地域であった。この「前史」を抜きに同診療所は語れない。

地域医療の堅持が診療所の原点

かつてこの地域には「長寿園」という国立療養所があった。開設は 1939 年。元々は結核患者の療養施設だが，地域住民の一般診療も行っていた。各地で設置を拒否された末，村民の診療も行う条件で，旧坂上村に受け入れてもらった経緯がある。

戦後，結核患者の減少と地域の高齢化が進むと，一般診療，特に高齢者医療が占める比重が大きくなり，地域になくてはならない存在になっていった。しかし 1984 年，国は突如「廃止」を決める。当時の中曽根康弘首相が，国鉄民営化の勢いに乗って掲げた**国立病院再編の最初の“ターゲット”**にされたのだ。実は吾妻郡は中曽根氏の選挙区。氏としては自らの身を切って「改革」への決意を見せたつもりだったかもしれないが，住民には支持してきた議員の「裏切り」と映った。

住民たちは猛反発。町や医療機関職員の労働組合も巻き込んだ激しい反対運動が開始された。その運動の最前線にいたのが，全医労（全日本国立医療労働組合）の専従職員になって間もなかった今野氏である。

▲▶診療所の待合室。一角には畳敷きのコーナーがあり，コミュニケーションの場として来院者に好評。奥は薬局のカウンター。６月からは院外処方になる。送迎車は調剤薬局を経由して利用者の便宜を図るとのこと。

手を焼いた政府と厚生省（当時）は様々な策を講じて運動の“切り崩し”にかかった。例えば「特例中の特例」と称して，国立で代替医療施設の開設を約束。これにより町は反対運動から退いたが，今野常務理事は「形式的なものであることは最初から明白だった」と振り返る。事実，後年できた「坂上診療所」は，診療日時を限定するなど，地域医療の充実には程遠い内容だったという。

激しい反対運動により，長寿園は当初の予定（1986 年）を過ぎても命脈を保っていた。今野氏は地元実力者と何度も上京，陳情や交渉を繰り返したが，打開策は見出せない。そして 1990 年３月，最大の“山場”が訪れた。業を煮やした国が，入院患者を渋川市の国立西群馬病院（当時）へ強制移送することを表明したのだ。

機動隊と移送阻止を叫ぶ住民の衝突という最悪の事態が危惧されたが，反対派と厚生省が話し合い，移送が延期されたことで何とか回避された。このとき厚生省の幹部から引き出したのが「もし，新たな医療施設の計画が地元で持ち上がったら，最大限の配慮をする」という言質だった。

「自分たちの診療所をつくろう！」

反対運動は足かけ７年に及んだが，結局，長寿園廃止は断行された（1991 年）。地域に虚無感が漂うなか，ある住民の言葉が今野氏の心に再び火を付けた。「あなたは転勤で他の場所へ行けるからいいだろう。でも我々は，病院がなくなったあとも，ここに暮らし続けなければならない」

「そう言われたら『私の役目は終わりです。サヨウナラ』とは言えません。『ならば**我々の手で診療所をつくろう**じゃないか』と提案しまし

た」（今野氏）

当初は「国が“特別に”つくってくれた坂上診療所があるのにどうして？」との声もあったが，今野氏らは，「こんな診療体制の診療所では地域医療が守れない」と住民を説得して回り，少しずつ賛同を得ていった（ちなみに坂上診療所は年を追って縮小され，2009年に閉鎖された）。

とはいえ，診療所の設立には莫大な資金が要る。最初は生活協同組合を組織して出資を募ろうと考えたが，この地域の人口では生協の認可基準を満たすのはむずかしいことがわかった。そこで医療法人の設立に目標を転換。1992年2月に設立準備会が発足した。出資者は今野氏はじめ25人。全員，失敗して財産を失うリスクを覚悟したという。さらに今野氏は「住民一人ひとりに支えられた診療所」という理念を実現させるため，ユニークな仕組みを編み出した。現在も続く，**『大戸診療所友の会』**である。

「一口1万円の『特別会費』を納めていただき，間接的に診療所の運営にかかわってもらう制度です。生協的な仕組みといえるでしょうね」

人間ドックの料金割引や親睦旅行などの「特典」はあるが，実質的には個人が診療所へ出資する仕組みだ。会員を募ると，最初の1カ月だけで100名を超える申込みを集めた。住民の期待の大きさがうかがえる。

▲今野義雄常務理事（右）と髙柳孝行所長（第4代理事長）

設立準備会は用地選定や施設建設，医師や看護師の確保などに奔走。数々の困難も切り抜け，1994年5月，医療法人設立を県へ申請した。認可が下りたのは同年7月。並行して進められていた建物は8月末に竣工。そして10月，大戸診療所は診療を開始した。最初から医療法人で，しかも**医師ではない者が中心となって設立した診療所**は全国でもめずらしい。

「過疎化」「患者減少」との戦い

昨年開設20周年を迎えた大戸診療所は，現在，常勤医1名（診療所長）と非常勤医6名で，内科，外科，整形外科，心療内科に対応する。

非常勤医は専門や担当曜日が異なるが，初期診療はどの日も行う。そして必要に応じ，専門医の担当日を次の来院日に指定する。また，ここで対応できないと判断されたら，他の病院を受診するよう速やかに手配する。

「私は**『1週間で総合病院』**と表現しています。1週間通せば標榜する科を全部受診できるわけです。**当診療所の最大の役割は，医療の“窓口”**となること。大病院のように患者が大勢来るわけではないので，日替わりでも十分対応できています」

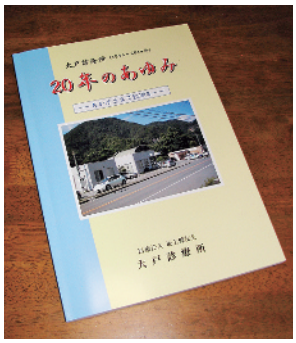
そうは言っても，**近年の患者減少は深刻**だ。診療所の開設当時は約4500人だったこの地域の人口は，現在は2900人台まで減少，かつては1日平均60人いた来院患者も，現在はせいぜい30人強とか。経営に直結するだけに深刻だが，住民が寄せる期待は相変わらず大きい。800名を超えるという『友の会』の会員数がそれを物語る。経営難を理由に閉院しては，国が長寿園にしたことと変わらない。患者が1人でもいる限り踏ん張らなければならない。

そのため同診療所は様々な試みを行ってきた。介護事業もその1つ。

「2000年4月に**デイケアを開始**したのは，ニーズへの対応でもありますが，診療所の経営を考慮した側面もあります。ここを医療と介護の総合拠点にしようということです」

もっとも，介護報酬引下げもあり，きびしい状況は相変わらずという。

合理化も実施している。今年は，これまで行っていたデイケアを「デイサービスおおど」（2011年開設）に統合した。デイケアとデイサービスは内容が異なるが，似た部分があるのも事実。報酬の請求等に留意すれば同じ場所での実施は可能と判断し，集約に踏み切った。人的な効率化が図れるとともに，より充実したサービスが提供できると期待している。



◀▼開設20周年の昨年，これまでの歩みを振り返り，診療所の“原点”を再認識しようと記念誌が発刊された。下は，『20年のあゆみ』に再録された，開院を知らせる「友の会ニュース」の第11号（1994年10月4日発行）。

診療所がリードする“村おこし”

薬の院外処方も実現した。これまでは，地域内に調剤薬局がないため診療所内で処方していたが，それが経営を圧迫する一因にもなっていた。これまで多くの薬局に開設を打診するも，「売上が見込めない」との理由で断られ続けてきただけに，悲願成就といえる。

「安中市の調剤薬局ですが，採算より地域づくりに貢献したいと出店を決めてくれました。せっかく来てくれるのですから，我々も地域を挙げて応援したいと考えます」

具体的には，薬局で日用品や食品等を取り扱うとともに，将来的には農産物などの販売所や公衆トイレなどを設け，車が気軽に立ち寄れる場所にしようという構想。現在，地域内にはコンビニもガソリンスタンドもなく，加えて八ッ場ダムの建設に伴って新道の整備が進んでいるため，車の流れが近い将来変わることも予想される。それだけに**薬局を核とした商業施設**ができれば，**地域活性の新たな“起爆剤”**になり得る。

今野常務理事は，**診療所経営と「村おこし」は連動**していると考える。患者が来なければ診療所は立ちゆかないが，それには地域の人口を維持する必要がある。また，人を増やすには安心して生活できる環境が必須だが，それには医療機関が不可欠だ。両者は切っても切れない関係にある。

▼第20回を迎えた昨年の「健康まつり」（会場：坂上小学校）。地域で最も盛大な催しに成長した。ラストを飾る花火大会のスポンサーは大半が個人だ。大戸診療所が中心となり，200名余りの実行委員会が運営する。

▲５月２日に薬師山本正院で行われた「長寿まつり」。３回目の今年は350人近い人出があった。デイサービスの利用者もバスで参加した。

そのため，同診療所は開設以来，**地域活性化に積極的に関与**してきた。開設翌年から開催している８月恒例の「**健康まつり**」はその代表。花火大会や多彩なアトラクションが催される，地域最大のイベントだ。

また，３年前から坂上健友会の社員と地元有志で「**地域づくり懇談会**」を組織し，地域活性化の方策を論議し続けている。ここから「**長寿まつり**」という新たな催しが生まれた。

「診療所に来ていたお年寄りが，健康に長生きして最期は苦しまずにポックリ逝けるよう願掛けしたいと話しているのを聞いたのがきっかけ。地域づくり懇談会で，坂上健友会の社員でもある住職さんが『当寺で建立します』と手を挙げてくれました」

こうして生まれた“新名所”が，西部の浅間隠温泉郷にある，薬師山本正院の「長寿地蔵尊」，通称「ぽっくり地蔵」である。建立しただけでなく，春に「長寿まつり」を開催することにした。去る５月２日に第３回が開催されたが，350人近い人出で賑わったとのこと。夏の「健康まつり」と並ぶイベントに発展することが期待されている。

地域医療を自立的に堅持し，地域活性の拠点としても機能している大戸診療所は，全国から注目を集めている。その評価は高く，今野常務理事が2013年，保健・医療における“草の根”の功労者を称える「若月賞」を受賞したのに続き，2014年には，大戸診療所が「地域再生大賞」（共同通信社ほか主催）の準大賞に輝いた。

「国と散々喧嘩してきたので，賞をもらうのは，何だか複雑ですね」と笑う今野常務理事。その一方で「怒りは私のエネルギー源」とも語る。

今野氏の故郷は福島県浪江町。実家付近は放射線量が依然高く，国の除染対象からも外れているとか。またしても国の理不尽な“仕打ち”を被っているともいえる。しかし，だからこそ地域を想う心を理解し，自立する意義を人一倍認識しているのだろう。

この春，診療所近くにあった中学校が閉校になった。過疎化と患者減少の加速が危惧され，状況は予断を許さない。それでも地域医療を守り，活気に満ちた地域を目指して，大戸診療所の取り組みは続く。

（紗羅巳画文工房　清水一哉）

▼デイサービスの様子。利用者の最高年齢は100歳。「長寿の村」である。